



TITLE:

<Book Review>Hla Myint, The Universities of Southeast Asia and Economic Development, in Pacific Affairs Vol.xxxv, No.2, Summer 1962, pp.116-127

AUTHOR(S):

高木, 英明

---

CITATION:

高木, 英明. <Book Review>Hla Myint, The Universities of Southeast Asia and Economic Development, in Pacific Affairs Vol.xxxv, No.2, Summer 1962, pp.116-127. 東南アジア研究 1964, 2(2): 124-125

ISSUE DATE:

1964-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/54935>

RIGHT:

う。この論文は、タイ国には基本的に社会秩序を支えているものとして功德 (merit) と力 (power) の要因があると説く。社会秩序の維持にはむしろ経済的・政治的要因が大きな支えになっているし、ことにわれわれの社会では多くの場合それ以外の要因をさほど重要視しないとさえいえる。したがってここで説かれていることは、われわれには奇異に思われるほどである。だがこういう社会もあるのだ。まず功德については次のようである。

目指すことを成功させること、苦痛をまぬかれること、この点の能力に差があることによって世界にはおのずから序列ができあがっている。まず大きくは神々と天使が人間の上に位し、人間の下に他の動物が位置するという序列があるが、人間の間にも同様の理由によって序列が生ずる。この能力の発生は功德に依存する。功德は利心なきことと表裏をなし、他に恵むことによって功德は積まれる。功德を持つことが決定的に重要なことであるから、当然恵むことが大いに所望される。恵もうとする構えはタイ国人には恒常的なものになっている。人はこの功德の増減によって序列の中を上下する。そして恵む人とそれを受ける人によってこそ集団が誕生し、集団内はつねにこの関係が軸になっている、と。このようにのべる功德は、身分的上下の人間関係を排する道徳的理念であると解される。

これに対して、力は誰にでもある道徳的には中性的な個人の能力のことで、持ち前の能力や経験、知識のもたらす能力である。宇宙的原理ともいえる功德のはたらきに比べたらこれのはたらきはよわい。たとえば力によって娘を短期口説くことはできても、永続的結婚を成り立たせるのは功德である。そういう差はあるが、タイ国人にはつねにこの「力」を肯定する構えもあって、非道徳的に利を追って左に右に浮動する傾向がつよい。われわれから見れば忠誠とか誇りの意識があまりないとさえいえる。

こうした社会ではおのずから血縁者が相寄り、そこでは相互敬愛の心が失われてはいない。上記した力の承認がここでも見られ、ときに離反することはあるが、しかしやはり上の心がたしかに離反のスピードをにぶらせている、と。

この論文は人々の意識面のうごきに最大の注意を払い、したがってなかなか微妙な捉え方を試みていて、社会秩序ないし社会統制の把握を目指す課題に関連し

て興味ふかいものを示している。

かつてベネディクトが日本人について禁欲的倫理的側面と享乐的放縱の側面とを指摘した。所詮個人においてもつねに消え 難い 矛盾相剋の二つの側面ではある。両名ともいわばそれをついたといえるが、現実に社会の中で個人的にも集団的にもどのようにこの相剋が調整され生活の秩序が保たれているのか、より大きな関心はむしろそこにある。もっとも本論文は最初から目標をそこにおいていたのではなかった。

(築島謙三)

Hla Myint : *The Universities of Southeast Asia and Economic Development*, in *Pacific Affairs* Vol. xxxv, No. 2, Summer 1962, pp. 116~127.

教育の経済的価値あるいは投資的意義が今日ほど高く掲げられた時代は未だかつてなかったと言ってよい。この論文も、大学教育を経済発展と関連づけて考察しようとしている点において、一連の教育投資論と軌を一にするものである。ただ、東南アジアの教育問題が主として初等段階に集中している現在、高等教育の具体的問題を取り上げたところに意義がある。

植民地時代における東南アジアの大学は、送り出す卒業生が余りにも少なく、また職業教育や技術教育を犠牲にして高等普通教育 (liberal education) の比重を重くしすぎる傾向があったが、戦後そのあり方が批判され、大学の理念そのものが問題とされるに至った。しかし、大学がそのような基本的な問題を考え、それぞれの国の特殊な要求に適した新しい型の大学の概念を体系的に作り出す前に、これらの大学は押し付けてくる学生数のためにふくれ上がってしまった。このため大学はすし詰め状態となり、これが大学の水準を低下させ、経済発展をも阻害する結果になっていると言う。

したがって、大学教育が効果的に経済発展に寄与し得るためには、確かに、著者の指摘するように、東南アジアのほとんどの大学においてみられるこの詰め込みによる「交通難」(traffic jam) を緩和する実際的な方法を見出し、いろいろな面での需要と供給のバランスを確保する必要があるであろうし、また、教育支出のどれだけが実際に経済発展を促進するのか、そしてそれらの教育支出は他の経済発展計画にどのように

調和しているのか、という問題も分析されなければならないであろう。

しかし、それは教育の直接的利益あるいは促成的効果を期待した場合のことであり、それはそれとして、開発途上にある東南アジア諸国においては重要なことであるが、教育の基本的意義——著者の言葉を借りて言えば、「教育はすべての市民の基本的権利であり、教育を“消費財”としてそれ自身のために拡大することが社会的に望ましいという高邁な原理」——も忘れてはならないのではないか。私は、著者の否定する「気楽な主義」（“消費財”としての教育を拡大すれば、“生産財”としての教育、つまり人的資本への投資も自動的に増大することになり、したがって発展を促進するであろうという考え）をも擁護したい。一見無駄に見える教育も、何らかの意味で、必ず社会的・経済的發展の基礎となることを確信するからである。

著者は、ラングーン大学元学長で、現在はオックスフォード大学英連邦研究所のスタッフである。この論文は、文章の運びが雑なために、論旨のぼやけているきらいがある。なお、日米フォーラムの1963年8月号（23～34ページ）に岡村忠夫氏の邦訳が載っているが、必ずしも名訳とはいえない。（高木英明）

「*mou: pan: hlwa*」 *cau? me khayain myanma sape phyan. pwa ye: at.in:* 1963年12月, pp. 317.

東南アジアの研究は、従来のように、専ら、欧米諸国の文献にのみ依存していた状態から、直接、現地語の資料を対象とする方向へと、変って来つつある。ところで、現地語の資料の内でも、地方出版物は、その存在が地味なため、一般に見落とされる傾向が強い。しかし、東南アジアは、一国の中でも、場所が変われば、住んでいる民族も異なり、話されている言葉も違うのが普通であるから、地方文化を反映するものとして、地方出版物の存在意義は、無視できない。この欄で、非学術的な地方誌を取りあげた理由も、そこにある。

*mou: pan: hlwa* は、北シャン州チャウメ郡ビルマ文学普及協会が出版している年刊誌である。地方誌とはいっても、執筆者は郡内居住者のみに限られているのではなく、広く外部に開放されているらしく、ウー・テインマウンや、ルードゥ・ウー・フラのよう

に、一流の新聞、雑誌で活躍している著名人の寄稿もみられる。チャウメ町の特集記事は、流石に郷土問題を扱っただけあって、読みごたえがあった。行政的には、シャン州に編入されており、歴史的にも、シャン族藩侯の支配下にあったとはいえ、この町は、古くから、パラウン族によって、その発展が支えられてきた。この町の経済の中心は、茶である。ビルマ茶の大部分は、パラウン族によって栽培されてきたが、チャウメが、茶の売買によって成り立つ市場町である以上、その繁栄は、パラウン族と切り離しては考えられない。

*mou: pan: hlwa* は、全頁、ビルマ語のみであるが、シャン語、パラウン語等による各民族の特色を生かした記事も、できれば欲しいと思う。私は、昨年、名古屋大学の茶樹起源に関する学術調査団が持ち帰った資料の一つで、タウンジー県ピンラウン郡公安兼行政委員会から1962年に出版された「煙草、茶、うこんの地域栽培並びに販売法報告書」と題するパンフレット（ビルマ文）に目を通す機会を得たが、これも地方出版物の一つとして、特色豊かな内容をもっていた事が、記憶に残っている。現地語資料の蒐集は、今後、ますます重要性をましてくると思うが、首都を中心とした出版物だけでなく、地方出版物にも、関心を払う必要があると思う。（大野 徹）

МАУН МАУН НЬУН, И.А. ОРЛОВА, Е.В. ПУЗИЦКИЙ, И.М. ТАГУНОВА: *БИРМ-АНСКИЙ Язык* Москва 1963 pp. 122.

ソ連における東南アジア諸語の研究が、最近急速に進展しつつある事は、既に西田龍雄助教授（東南アジア研究第二号「ヨーロッパにおける東南アジア諸言語の研究について」）によって紹介されたが、この度「東洋及びアフリカ諸外国語」(ЯЗЫКИ ЗАРБЕЖНОГО ВОСТОКА И АФРИКИ) シリーズの一環として、待望久しい「ビルマ語」が公にされた。

この本の事は、1964年3月10日付のビルマ字新聞「*myanma. alin:*」紙上で紹介された事があり、私としても多大の期待をもってしたが、ようやく入手できたのでとりあげる事にした。

本書は、全六章から成り立っており、その構成は次の通りである。1. 序論 2. 音韻論 3. 文字組織 4. 形態論 5. 統辞論 6. 付録。この内、序論に